

# Society's Activities

関東支部 平成18年度 現地検討会報告

関東支部広報担当 小野田 敏

## 1. コース1：群馬の地すべりを見る（生須地すべりと万座地区熊池地すべり）

開催日時：10月20日 参加人数：25名、講師：2名 計27名  
群馬県内の地すべり箇所として、生須地すべりと万座地区熊池地すべりを視察した。なお本検討会は群馬県、(社)斜面防災対策技術協会、関東地質業協会のご後援と林野庁関東森林管理局、吾妻森林管理署、六合村の御協力をいただいた。厚く御礼申し上げます。

### 1.1 生須地すべり

生須地すべりは、六合村の中心部分で発生した新第三紀層での大規模な地すべりである。生須周辺には温泉が湧き出ているため、基盤岩は熱水変質の影響により脆く変化した箇所が多く見られ、この付近ですべり面が形成されている。また、現在でも実効雨量200mmを超えると活動が記録されており、特に昭和64年の豪雨では、地すべりブロック末端に位置する竜宮橋で太鼓橋のように大きな隆起が記録されている。このような断続的な地すべり活動に対応するため、可動式の橋に掛け替えられている。中学校等の保全対象が存在しているため迅速な対応が望まれており、FEM浸透流解析による効果的な集水井工の検討とともに、GPS等による自動観測機器での監視体制といったソフト対策を併用した事業を実施している。

現地では、鶴飼会長はじめ、群馬県、担当コンサル講師からの浸透流解析、地すべり機構等の分かりやすい説明に始まり、橋梁の可動式のアバット部やソフト対策システム、滑落崖の状況等を参加者全員で見学し、対策のあり方等について議論を深めることができた。

### 1.2 万座地区熊池地すべり

万座地区熊池地すべりも新第三紀層の地すべりであり、現在活動中の活火山の斜面に位置し、広範囲で熱水変質の影響を受けている。この地域は火山性ガスの危険地に指定されており、調査初期では確認されなかったガスが確認されるようになったため、計画されていた集水井工の見直しが必要となった。また、この地すべり地は強酸性の土質であるため、対策工を施工しても錆の問題が発生する。特に、アンカー工では非常に重要な問題であるため、耐酸性のグラウト材や酸化の心配のない引張材を使用している。現在も継続して活動しているブロックがあるため、活動範囲を特定するための調査や対策工の施工が継続されている。

現地では、林野庁関東森林局、担当コンサル講師による丁寧な説明後、集水井工に代わる150m級の長大な水抜き横ボーリング工、耐腐食性の受圧版と引張材料によるアンカー工が施工されている滑落崖下に集まり、施工方法、効果等について議論できた。



写真-1 生須地すべりGPS機器を背後に説明を行う鶴飼関東支部会長



写真-2 熊池地すべり滑落崖下を歩く参加者一同



写真-3 根府川駅前での井上講師らの説明



写真-4 慰霊碑と現在のJR根府川鉄橋

2. コース2：関東大震災の災害跡地を見る（根府川の地すべりと白糸川の土砂災害）

開催日時：11月17日 参加人数：28名、講師：2名 計30名

本コースは関東支部設立記念シンポジウムでの内容を受け継ぐ形で、関東大震災での代表的な土砂災害地の視察を行った。本検討会は、神奈川県、斜面防災対策技術協会、関東地質業協会の御後援をいただいた。厚く御礼申し上げる。

一般に根府川駅周辺の土砂災害として、列車を巻き込み大惨事(死者200名)となった根府川駅付近での地すべりと根府川の集落を飲み込んだ白糸川の土砂災害は同一のものとして取り扱われることが多いが、実際には別々に発生している。根府川駅付近の地すべりは、根府川駅付近に分布する堅いO10溶岩層の上位軽石層をすべり面として上部のO11溶岩（根府川石）が滑動し、駅舎や列車を飲み込み

海岸にまで土砂が達したものである。現在でも残骸の一部が海中にあり、ダイビングスポットとしても紹介されている。白糸川での土砂災害は、地震直後に箱根外輪山の火口地区発生した地すべり性崩壊が、岩砕なだれとして白糸川を高速で流れ下り、河口付近の根府川集落を飲み込んだものである。発生源となった大洞崩れも溶岩中の軽石層を境に発生したと推定されている。

現地では、釜井講師と井上講師が根府川集落の被災状況や原因を丁寧に説明された。また、お昼には神奈川県等から提供された当時の貴重な写真が紹介された。午後は大洞崩れまで足を伸ばし、その威容と崩壊堆積物を、白糸川沿いでの露頭では岩砕流堆積物を確認し、地震によるマスムーブメントについて議論を深めることができた。

投稿を計画している皆様へ

日本地すべり学会誌編集委員会

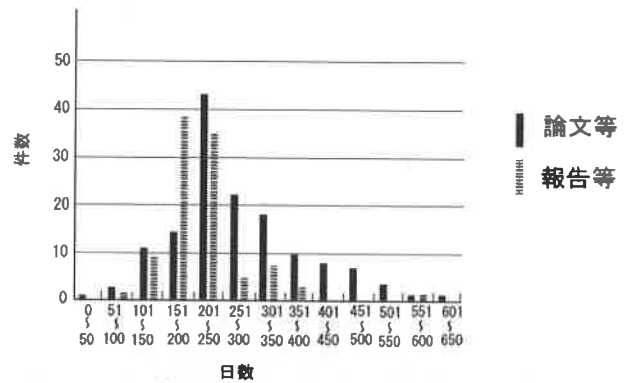
日本地すべり学会誌の投稿から掲載までの期間についてお知らせします。

投稿いただいた原稿は編集委員会および担当編集者を経て査読者に送られ、査読終了後に再度編集委員会の審議を経て2ヶ月毎に発行される本誌への掲載となります。下図は2000年から2005年における投稿原稿の受付から掲載号発行までの日数を示したものです。

査読者数や査読結果および対象が特集号であるかどうか、さらに発刊号の締め切り日との兼ね合いも含めて掲載までの期間は大きく異なるようです。現在、編集委員会としては一部電子投稿の採用や、査読期間の短縮など掲載までの期間をできるだけ短縮するよう努力しております。

投稿に際しましては以上をご理解の上よろしく申し上げます。

今後とも多くの投稿をお待ちしております。



投稿原稿の受付から掲載号発行までの経過日数 (2000年～2006年)

平成18年 (2006年) 査読者の紹介

日本地すべり学会誌編集委員会では、年1回査読者の氏名を公開しております。平成18年1月1日から平成18年12月31日までに受け付けた投稿原稿全67編（論文20編、研究ノート4編、討論2編、報告20編、ニュース8編、シリーズ2編、講座他11編）の査読にご協力いただいた査読委員の方々をご紹介しますとともに、ご協力に心から感謝申し上げます。

阿部真郎  
岩橋純子  
大村 寛  
釜井俊孝  
倉岡千郎  
執印康裕  
杉山友康  
千木良雅弘  
野崎 保  
檜垣大助  
丸井英明  
山田正雄  
Lulseged Ayalew

新井場公徳  
上野雄一  
大河原正史  
川邊 洋  
黒田清一郎  
守随治雄  
鈴木素之  
土屋 智  
濱崎英作  
福岡輝旗  
丸山清輝  
山邊康晴  
若井明彦

井口 隆  
鶴飼恵三  
大塚 悟  
北上博見  
蔡 飛  
白木克繁  
Tiwari BINOD  
綱木亮介  
原口 強  
星野 実  
森屋 洋  
山野井徹

石井靖雄  
渦岡良介  
小川紀一朗  
木村隆俊  
佐藤 修  
新屋浩明  
高田将志  
戸松 修  
針生真也  
松浦純生  
矢田部龍一  
横山俊治

今泉眞之  
梅村 順  
奥山武彦  
久保田哲也  
佐溝雅彦  
末峯 章  
田近 淳  
中川 涉  
日浦啓全  
松倉公憲  
山崎孝成  
吉松弘行

(敬称略, 五十音順)